

日常の繰り返しのなかで現れる「危機とケア」

静岡大学 地域創造教育センター

講師 辻本侑生



1. 民俗学的災害研究の展開と課題

本稿は、東日本大震災後大きく転回している民俗学的災害研究を「危機」の視点に拡張し、さらにそれを医療人類学におけるケア論と接合する方途を探るものである。

筆者なりに定義するのであれば、民俗学とは、日常的なものごとについて、その歴史性や多様性を探究する学問である。例えば毎年繰り返し訪れるお正月には、何を食えることになっているのか(あるいは何を食べてはいけないのか)、決まった手順で行われる儀礼や行事にはどういう意味が込められているのか、といった事柄について、民俗学者たちは探究してきた。他方で、繰り返されるのは年中行事や儀礼だけではなく、災害のような危機も、頻度や規模は都度違うものの同じ地域で繰り返されており、現代の民俗学はそうした一見「非日常」に思えつつも、繰り返される事象についても取り組み始めている¹⁾。既に別の拙稿²⁾で研究動向を整理した通り、民俗学的災害研究は阪神淡路大震災後も蘇理³⁾、森栗⁴⁾などがみられたものの、民俗学全体として災害研究が本格的に展開するのは東日本大震災以降であり、①文化財レスキューや無形の祭礼・芸能の調査と復興支援、それらを踏まえた展示実践⁵⁻⁷⁾、②地域に内在する災害対応の論理を解明する研究が急速に進展してきた。

このうち、後者の②の研究動向について特に注目すると、これらの研究は「三陸沿岸に暮らす人びとは、なぜ災害がくる地域に住み続けるのか?」という問いを立て、「安全」「リスク回避」という名のもとで復興政策に潜在してきたパターンリズムに対抗する、地域の人びとの「合理性」の解明を目指してきた^{8,9)}。津波が来る可能性がある海の近くに暮らし続けるとい

う、一見「非合理」に見える人びとの選択にも、海の恵みとともにある地域の歴史の中の繰り返しで蓄積されてきた合理性が潜在している。こうした視点はフィールドワークを伴う民俗学・人類学・社会学などに特有の相対主義的な見方であり、地域に「棲まう者」の視点から避難行動のコンテクストを捉えようとする研究も、民俗学と防災学の連携のもとで試みられている¹⁰⁾。

「より安全に」という名のもとで繰り返されるパターンリズムに対抗し、地域に暮らしてきた人びとの合理性を汲む植田や川島のような民俗学的災害研究の意義は、いくら強調してもしすぎることはない。しかし、そこにあえて新しい論点を付け加えるのであれば、人びとは常にその地の中で合理的な判断をくだしながら繰り返し襲い掛かる災害と向き合ってきたというよりは、タイミング・規模が不可知な災害リスクの中で、一体どのように対処していけばよいのか、揺れ動いてきたような側面もあるのではないだろうか。さらに近年では多重被災・複合災害など、それまで地域が経験してこなかった危機の現出もみられる。そして、人口減少、福祉課題の増大など、「災害」とカテゴライズされないものの、地域を緩やかに覆う日常的な危機もみられている。こうしたことから筆者は、これまで民俗学が蓄積してきた地域に内在する災害対応の論理を解明する災害研究をさらに発展させ、複雑で不可知な「危機」の民俗学への拡張の必要性が要請されていると考えている。そして先回りするのであれば、そうした「危機」を捉える上では、災害研究とは別個の医療・福祉研究の文脈で展開してきたケア論が、実は重要な参照点になるのではないかと考えている。

以上のような視点を踏まえ、本稿では、民俗学的災

害研究を「危機」研究へと拡張したうえで、それをケア論と接続して解釈してみる試みを、筆者がこれまで北東北地方の津波常習地で行ってきた研究を踏まえて萌芽的に提示したい。

2. 北東北の二つの津波常習地の事例から

(1) 100年以上にわたる集落移転と、公民館の立地を巡る調整

まず提示する事例は、明治三陸津波（1896年）、昭和三陸津波（1933年）、チリ地震津波（1960年）、そして東日本大震災（2011年）と度重なる津波にともない、集落形態が変動してきた岩手県陸前高田市小友町只出集落である^{補注1)}。筆者がフィールドワークや資料調査を通じて明治期以降の只出集落の集落形態を復元したところ、この集落はもともと太平洋に面し、漁港沿いに家屋が密集した典型的な漁村景観であったが、1896年の明治三陸津波後には個別の高台移転が行われ、再び海沿いに戻ることもみられていた。また、個別の高台移転に加え、1933年の昭和三陸津波では住宅組合法を活用した集団移転が行われ、密集していた集落は細胞分裂のように景観を変えていったことが明らかになった。

ただし注目すべきは、集落自体が緩やかに高台に移転していったのに対し、自治の中心たる公民館は一貫して低地に立地し続けたことである。実は東日本大震災の4年前の2007年頃、老朽化にともない、高台移転する議論も集落内でみられていた。2003年の宮城県沖地震などの情報も集落内に設置された委員会で検討され、津波のリスクは認知・議論されていた。しかし、新たな公民館の建設に適した土地がない、集落人口も減っている、そうした中での移転には予算的なコストがかかるということもあり、慎重な議論の末、津波のリスクはあるが、公民館高台移転は見送りとなったのである。

この事例からは、数十年に一度津波に襲われてきた三陸沿岸の集落の人びとが、常に先行研究が指摘したような自然とともにある暮らしのなかの合理性の

とで判断してきたわけでは、必ずしもないことが浮かび上がる。むしろ見えてくるのは、暮らしには常に不確実な危機が内包され、様々な制約条件のもとで、人びとは状況を調整しながら判断をくだしている、ということではないだろうか。

(2) 日常的に経験される軍事的危機と、津波の危機の交差

次に提示する事例は、青森県三沢市の沿岸部地域である。青森県は東日本大震災の被災地であり、かつ明治三陸津波や昭和三陸津波の被害もみられてきた地域であるが、死者・行方不明者数および流出家屋数が福島県・宮城県・岩手県に比べて少ないことなどから、「被災地」としての注目が集まりにくい地域である。事実、筆者が池田浩敬と実施した三沢市での調査によれば、岩手県三陸沿岸地域に比べて災害伝承が希薄であり、東日本大震災時の避難行動をみても、津波が家の中に到達してから避難を開始した等の事例もみられた¹²⁾。他方で、2025年12月には青森県八戸市沖で地震が発生し、今後、北海道千島海溝地震のリスクも指摘されている、津波の危険性が潜在している地域である。

青森県三沢市を取り巻く自然・社会環境として注目すべきは、津波のリスクに加え、軍事施設が置かれている点である。本州北端という軍事的に要衝と見なされる地にあり、三陸沿岸のような急峻なリアス地形ではなく砂浜海岸が広がる三沢市沿岸部では1930年代に日本軍の飛行場が置かれ、戦後そこを接収した米国空軍が駐留し、現在に至っている。「三沢市では地域と基地の関係は共存共栄である」という語り口はしばしば聞かれるものの、2001年の同時多発テロ事件や2003年のイラク戦争などのタイミングでは基地周辺の検問が強化され緊張が高まるなど、国際情勢と街の雰囲気は密接に関わっている。さらに深刻なのは、1970年代以降、米軍の離発着訓練が盛んに行われ、その結果、騒音問題が深刻となったり、航空機からの落下物がみられるようになったりしたことである。

1980年代には上空で訓練飛行が行われる沿岸集落から集団移転の要望が三沢市および東北防衛局に出され、交渉の結果、1990年代に訓練航路下の沿岸部集落の一部が内陸移転することとなった。そしてそれから約20年後の2011年、東日本大震災が発生し、移転前の集落の場所は浸水し、内陸移転していた集落は、結果的に東日本大震災の津波被害を免れたのである。

この事例から見えてくるのは、当然ながら、「内陸移転していてよかった」、という単純な教訓ではない。災害と軍事基地という複合的な危機が交差するなかで、地域の人びとがどこに棲まうべきか、悩み苦しみながら行動してきた様相を捉える必要性がうかびあがるのである。

3. 民俗学的危機研究とケア論の接続へ

以上に提示したような事例を考える上で、筆者は災害研究のみならず、あえて視点を変えて、医療・福祉に関する研究が参照点になりうると考えている。ただし民俗学で既に一つの研究分野として確立しつつある災害研究に対して、医療・福祉の研究は介護現場で民俗学的実践を行う「介護民俗学」¹³⁾が提唱されているものの、現時点においては、まとまった数の研究者が参入している分野であるとは言いがたい。

そこで本稿では、隣接分野である人類学の研究を参照したい。参照するのは、アネマリー・モルによる『ケアのロジック』である¹⁴⁾。同書は、オランダのある病院の糖尿病外来におけるフィールドワークをもとに、糖尿病のある人びとと彼らを支える専門職たちに見られる「ケアのロジック」を浮き彫りにしたエスノグラフィである。以下、同書の議論を筆者なりに要約すると、次のようになる。

モルは、「選択のロジック」と「ケアのロジック」という二つの対立概念を提示して議論を進めている。「選択のロジック」とは、専門家や医療機器メーカーの広告から示される情報をもとに、自らの利用するサービスや機器を自ら主体的に「選択」するあり方であり、今日の医療倫理においても望ましいとされる考え

方である。例えば糖尿病患者が用いる血糖値測定器は高度に市場化されており、ヘルスケア企業の広告は「糖尿病であっても山歩きを楽しめる」と呼びかけ、患者は自身に合った機器を「選択」する「消費者」となる。患者自身が自律的に医療やサービスを「選択」するあり方は、西洋近代的な「市民」概念と親和的であり、一見疑いを差しはさみにくいだが、実はそうした「市民」概念は疾病や身体の不自由とともに生きる人びとの姿を想定してこなかった。

モルはそうした「選択のロジック」とは違った生のあり方として、糖尿病外来における患者と専門家の対話、および患者の語りの分析を通して、「ケアのロジック」を提示する。この「ケアのロジック」は、例えば定期的な血糖値の自己測定を続けることのできない患者に対して、それは患者自身の「選択」であると突き放すものではない。なぜ、測定を続けられないのか、それは使用する機器の問題なのか、それとも測定する場所の問題なのか、といったように、患者固有の状況を把握し、専門職間で課題を共有して調整し、その状況を患者と専門職がともに「手直し」(Mol 2008=2020: 127)することを試みる実践のあり方である。「選択のロジック」を前提とした公衆衛生政策は、一人ひとりの「個人」に対して、健康に配慮した生活を送ることを求めるが、糖尿病と密接に関連する食事という行為一つをとっても、日常的に誰とどのように食べるかは個人の単位に切り離すことはできない。そして同書の最後にモルは、「善いケア」の実現のためには、個人を「放置」せず、あらゆる関係者がともに試行錯誤することが重要であり、人類学者も医療の専門家と違った仕方ですこに加わることができると主張する。

オランダの糖尿病外来をめぐるエスノグラフィと、北東北の津波常習地の歴史民俗誌は一見何の関係もないように思えるが、血糖値の測定や服薬を日々繰り返しつつ、不自由な身体と付き合っ「手直し」しながら生きていく様は、災害リスクや軍事基地の立地、人口減少など様々な危機とともに暮らす三陸沿岸の

人びとの生と重なるように考えられる。災害常習地に暮らす人びとはパターンリスティックな復興政策に抗し、地域で培ってきた合理性をもとに自らの暮らし方を「選択」しつつも、他方でそれはモルのいう「選択のロジック」のような自己責任化された行動ではない。むしろ地域の人びとの行動はモルのいう「ケアのロジック」に近いものであり、不確実な自然・社会条件のなか、時には（後から考えれば）最適ではなかったような選択をするかもしれないが、それらを含めて試行錯誤と調整を伴う日常を繰り返しているのではないだろうか。

以上を踏まえ、ケア論を導入することで民俗学的災害研究に拓ける新たな視座をまとめてみたい。これまでの民俗学的災害研究が想定してきた人間像は、災害伝承や地域に蓄積された自然との関わりをもとに、その地域の合理性をもって災害に立ち向かう地域や人びと、という側面が強かった。それはもちろん誤りではないし、重要な視点である。けれどもそれに加え、本稿が述べてきたような民俗学的災害研究と医療人類学の知見の接合によって想定される人間像とは、繰り返される不確実な日常の中で、危機への対応に向けて常に何らかの調整をしている人びと、というようなものである。

クィア・スタディーズから危機論を展開するローラン・バーラント¹⁵⁾は「結局のところ日常とは、一貫性のなさや矛盾の数々を吸収する多孔的な領域なのであり、人びとはその領域を、不器用によろめいたり、なかば無意識にだったり、常識を固く信じたりしながら、なんとか進んでいく」(Berlant 2011=2025: 86)のものであると述べているが、これは本稿が考える危機と日常の視点ときわめて近い。多重化する災害に加え、個人的な危機や生きづらさも含めて、私たちの日常は様々な危機が輻輳しつつ、繰り返されていく。そうしたフィールドのリアリティを捉えていく研究が、今後の民俗学には求められていくと、筆者は考える。

謝辞

本稿は、JSPS 科研費 22K20070 の助成を受けて執筆したものである。

補注

(1) 本節の事例の具体的な実証は、辻本¹¹⁾を参照。

参考文献

- 1) 辻本侑生(2024)「繰り返すことの民俗学 日常・クィア・強迫症」『現代思想』52-6, pp.33-41.
- 2) 辻本侑生(2025)「危機」を捉える民俗学的視座に向けて『静岡大学地域創造教育研究』6, pp.1-12.
- 3) 蘇理剛志(2003)「阪神・淡路大震災と慰霊 『震災モニュメント』以前」岩本通弥編『記憶 (現代民俗誌の地平 3)』朝倉書店, pp.14-40.
- 4) 森栗茂一(2005)「神戸の地藏信仰と復興まちづくり 伝承再構築支援の民俗学」『日本民俗学』243, pp. 141-149
- 5) 高倉浩樹・滝澤克彦編(2014)『無形民俗文化財が被災すること 東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社
- 6) 加藤幸治(2017)『復興キュレーション 語りのオーナーシップで作り伝える「くじらまち」』社会評論社
- 7) 加藤幸治(2021)『津波とクジラとペンギンと 東日本大震災 10 年、牡鹿半島・鮎川の地域文化』社会評論社
- 8) 植田今日子(2016)『存続の岐路に立つむら ダム・災害・限界集落の先に』昭和堂
- 9) 川島秀一(2017)『海と生きる作法 漁師から学ぶ災害観』富山房インターナショナル
- 10) 木村周平・辻本侑生・浅野久枝・池田浩敬・川島秀一・小谷竜介・中野泰(2021)「「棲まう者の観点」からの津波避難行動の検討 民俗学と防災学の協働の試み」『日本災害復興学会論文集』18, pp. 11-20
- 11) 辻本侑生(2024)「「危機」とともに暮らすこと—陸前高田市小友町只出集落の災害史—」『現代民俗学研究』16, pp. 35-47.
- 12) 池田浩敬・辻本侑生(2023)「東日本大震災時の津波避難等に関する調査 青森県三沢市三川目・六川目地区での事例」『地域安全学会梗概集』52, pp.69-72.
- 13) 六車由実(2012)『驚きの介護民俗学』医学書院.
- 14) Mol, Annemarie(2008) *The Logic of Care : Health and the Problem of Patient Choice*, Routledge(=2020『ケアのロジック 選択は患者のためになるか』田口陽子・浜田明範訳, 水声社).
- 15) Berlant, Lauren(2011) *Cruel Optimism*, Duke University Press(=2025『残酷な樂觀性』, 岸まどか・ハーン小路恭子訳, 花伝社).